

コミュニティ

community
The New Apostolic Church around the world



Number 4, 2021

2021(令和3)年第4号・日本新使徒教会発行

〒206-0014 東京都多摩市乞田 1320 (本部) Tel. 042-374-0070

〒799-2468 愛媛県松山市小川甲 110 番地 17 Tel. & Fax. 089-994-3556

<http://www.nac-japan.org>

日本小教区主任牧司：門平 彰弘 E-mail: kadohira.nac@icloud.com

監修：高島 健郎 / 編集担当：松岡 利恭



日本新使徒教会

- 3 今を形作る
- 4 上を向いて、前を見つめて、忍耐強く走り抜く
- 4 主使徒によるアンゴラ訪問
 sacrament (23):
- 5 主からいただくたくさんのごちそう
 sacrament (24):
- 6 最後の晩餐から聖餐に至るまで
 sacrament (25):
- 7 存在と臨在



今を形作る

2021年に向けた標語は私たちの未来に関するのですが、今現在のうちにこの未来を形にする必要があり、このことが私たちすべてに課せられた務めです。今回はスイス担当のユルク・ツビンデン教区使徒からのメッセージです。



今年の標語は一つの約束です。こんにちあらゆる機会を活用しよう、言い換えれば、その機会を値打ちのあるものとしようという気持ちのあるすべての人々は、この約束を実現させることができます。「そこで、知恵のない者ではなく、知恵のある者として、どのように歩んでいるか、よく注意しなさい。時をよく用いなさい。今は悪い時代だからです」(エフェ5:15-16)。これは使徒パウロがエフェソの会衆に向けて書き送った手紙の言葉です。彼は、賢くなって何が神様の御旨かを理解するよう勧めています。使徒パウロによるこの勧めは、こんにちの私たちにも言えることです。

私たちが感じているように、今はますます悪くなっています。あからさまに法を犯します。つまり多くの人の愛が冷えているのです(マタイ24:12)。さてイエス様は、すべての人、とはおっしゃらず、多くの人の愛が冷える、とおっしゃいました。つまり、いかなる困難においても神様と隣人を最後まで愛することは可能だ、ということです。「しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる」(マタ24:13)。

今を形作る

かつてある信心深い人がこう言いました。「未来を確信できる人は皆、今を形作ることができる。」私たちの未来は、夢で見たものではありません。キリストの約束に基づいていま

す。つまり、キリストが再びおいでになって、天の故郷(ホーム)へご自分の民をお連れになり、子羊の婚宴を催されます。その後、キリストは千年の平和王国をお建てになります。最後までキリストに従ってきた人々は、王の血統を継ぐ祭司としてキリストと共に仕えることができるのです。

私たちの標語にある約束を実現させるために、私たちは今を形作っていかねばなり

りません。どうすればできるでしょうか。日ごと新たに主に従うことを決意し、常に率先してキリストを手本とした生活を送り、次の言葉のようにヘブライ人への手紙を書いた人がやったことをするのです。「自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか。信仰の導き手であり、完成者であるイエスを見つめながら、走りましょう」(ヘブ12:1-2)。この信仰の戦いを務めとして担う人は皆、「私は世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」という主の助けを体験することができます(マタ28:20)。

神を信頼する

今年も神様の助けを信頼しましょう。世の中の状況がどう展開するのかわかりませんが、私たちはイエス様の約束を信じます。「行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたを私のもついでに迎える。こうして、私のいる所に、あなたがたもいることになる」(ヨハ14:3)。この約束は私たちの未来であり、すでにイザヤが預言したように、大きな喜びと確信で私たちを満たしてくれるのです。「私は主にあって大いに喜び／私の魂は私の神にあって喜び躍る」(イザ61:10)。

(2月4日 nac.today より)

上を向いて、前を見つめて、忍耐強く走り抜く

愛を経験したことがある人ならだれでもわかることですが、愛は人を変えます。神様を愛することで私たちも変わります。2021年の標語を、レナート・コルプ教区使徒（アメリカ）が考察します。



神は愛なり—この世にある愛のすべては、神様から生まれます。人間が感じられる最高の感情は、愛している状態にあることです。愛という感情は、皆さんが普段いろいろな事をしていても、継続的に思いや心を占有します。二人で署名する、二人が一緒にいるのを夢見る、結婚式のことを考える…これらはみな喜びを真剣に味わえる、うれしい感覚です。この愛という感情によって、未来について穏やかで落ち着いた安心感が得られるのです。

「キリスト、我らの未来」という今年の標語は、イエス・キリストへの深い愛に基づいています。ヘブライ人への手紙 12章の冒頭で「すべての重荷や絡みつく罪を捨てましょう」と、花嫁が花婿を深く愛する姿勢を見事に表現しています。愛するお方と一緒にいたいという思いで、この世から離れよう、そして新しい故郷すなわち神様の御国に属さないものと距離を置こうと決意します。これに自覚をもって本気で取り組むのは、一番の望みを実現させる力を得るためです。

「自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか。信仰の導き手であり、完成者であるイエスを見つめながら、走りましょう。」私たちはイエス様に向かって走ります！走り、努力し、戦い、克服する力を得るのに必要なモチベーションなどすべてのものは、イエス様を見つめることから出るので！イエス様を見つめ、イエス様について学び、イエス様に集中することで、私たちは変わることができました。そして今後も変わり続けることができます。イエス様を見つめることによって「光」を受けて、この世を越えて、平和と安定の場所に向かい、イエス様によって穏やかに落ち着くことができます。神様そして、花嫁となるために神様が用意してくださったすべての人々と、完全に調和し一つになることが、どのようなものになるのかを、霊的な意味で考えます。さらに聖書を読み進めていくと、主もまた私たちと一緒にいること、そして私たちと未来を共にしようと考えておられることがわかります。何と感動的で、励まされることでしょうか。「この方は、ご自分の前にある喜びのゆえに、恥をもちとわないで、十字架を忍ばれました。」花婿なる救い主は私たちとの愛において、私たちに寄り添うために、このことを自らに負われたのです。

イエス様と共にいるために、私たちはどうすべきでしょうか。イエス様を見つめ、前に向かって、忍耐強く走り抜き、イエス様と共にある未来を確信しましょう。

(2月15日 nac.today より)



(写真左)「愛する、帰る、受け継ぐ、責任を持つ、取り組む。」ジャン＝ルーク・シュナイダー主使徒は2020年1月11日、アンゴラ（アフリカ）のンサギで礼拝を司式しました。その中で主使徒は、「イエス様は私たちに、五種類の自由を使えるようにしてくださった」と説きました。

この礼拝には約3,300名が出席しましたが、その三分の一は子供でした。

sacrament (23) :

主からいただくたくさんのごちそう

聖書には、方法がほとんど書かれておらず、むしろ理由や目的に多くのページが割かれています。では、聖餐をどう解釈しているのでしょうか。今回は、これを制定されたイエス・キリストの言葉を検証します。聖書には、方法がほとんど書かれておらず、むしろ理由や目的に多くのページが割かれています。では、聖餐をどう解釈しているのでしょうか。今回は、これを制定されたイエス・キリストの言葉を検証します。



「これは、あなたがたのために与えられる…」

「与える」という語には「誰かに何かを譲る」という意味があり、時には「裏切る」という意味にもなります。イエス様は御自分のこれからのことについて弟子たちに話され、イスカリオテのユダは裏切り者の汚名を着せられましたが、聖書の原文ではパラディドミという語を使って書かれています。これは「譲渡」の意味を強める語です。聖餐を執り行うことによって、イエス・キリストによる究極の献身をお祝いします。

「…私の体…」

ギリシア語のソマという語には「体」のほかに「器官」つまり人全体という意味があります。イエス様そのものであるということは「これは私の体…」の前文でこう宣言されます。「イエスはパンを取り、感謝の祈りを献げてそれを裂き、使徒たちに与えて…」これはイエス様の生涯における集大成が基本にあります。すなわち肉の姿となられ、その肉が裂かれて死に渡されたのです。聖餐を執り行うことによって、神の擬人化〔＝神様が人となられたこと〕をお祝いします。

キリストの体は、キリストにおいてバプテスマを受けた人々の教会でもあります。交わりという側面があります。ただ集まるだけではなく、互いに親しく交わるのです。このことを使徒パウロはコリントの会衆にはっきりと述べています。というのはコリントの教会では、主の晩餐を祝う際にお互いの

気遣いがありませんでした。聖餐を執り行うことによって、会衆と彼らの主との緊密な交わりをお祝いします。

「これはあなたがたのために流される…」

ここでも「あなたがたのために」との文言があります。このイエス様の行為は、仕えられるためではなく、仕えるためのものです。これは、神の僕が「贖罪の献げ物」として御自身の命を献げるにより代わりに苦しみを受ける、というイザヤの預言を指しています。聖餐を執り行うことによって、イエス・キリストの犠牲をお祝いします。

「…私の血による新しい契約である。」

ここでマルコとマタイはモーセの言葉を引用しています。それはモーセが、神様がイスラエルと契約を結ばれる際のしるしとして、いけにえに献げた動物の血を人々にかけてた時に宣言した言葉です。一方パウロとルカは、預言者エレミヤが宣言した新しい契約について述べています。どちらにしても、聖餐を執り行うことによって、神様と人との間に契約が交わされたことをお祝いします。

「…罪が赦されるように…」

このことは、マタイによる福音書だけに書かれています。しかし、他の三つの福音書でも、罪が購われるために流されたいけにえの血と神の僕による苦しみにしても、証しとして含意していることに疑いの余地はありません。つまり、聖餐を執り行うことによって、イエス・キリストによる贖いの働きを記念します。

「…私の記念としてこのように行いなさい。」

パウロが書いたコリントの信徒への手紙一とルカによる福音書だけは、イエス様のなさったことを繰り返すよう命じられ

ていることが書かれています。使徒言行録によれば、エルサレムにあった初代教会ではすでに、パンを裂くことが恒常的に実践されていました。聖餐を執り行うことによって、イエス・キリストと共にした過去を記念します。

「主が来られる時まで…」

キリストの再臨に言及しているのはパウロだけですが、マタイ、マルコ、ルカはさらに踏み込んで、ぶどう酒をもう飲むことはない、とのイエス様による誓いを引用して（「私の父の国であなたがたと共に新たに飲むその日まで、今後ぶどうの実から作ったものを飲むことは決してあるまい」）、やがて訪れる御国について考察しています。聖餐を執り行うことによって、イエス・キリストと共にある未来をお祝いします。

「…主の死を告げ知らせるのです。」

告げ知らせる（カタンゲーロ）とは、静かな内向きな回想ではなく、声に出して宣べ伝えることです。しかも、以前にやっ

たから良いというものではなく、繰り返すこと、現在において今いる場所で何度も繰り返すものです。聖餐を執り行うことによって、イエス・キリストとその御臨在を公に伝えます。

「私の肉を食べ、私の血を飲む者は…」

ヨハネによる福音書には主の晩餐そのものの記述がありませんが、聖餐が不可欠であることをはっきり述べているものは、他にありません。つまり次のように書いてあります。「私の肉を食べ（逐語訳すれば「嚙（か）んで」）、私の血を飲む者は、永遠の命を得、私はその人を終わりの日に復活させる。」聖餐を執り行うことによって、イエス・キリストにある永遠の購いをお祝いします。

この時点ですでに、聖餐の概念が提唱はされたものの、使徒教父によってはじめて、その定義が明確になりました。それ以前に、聖餐を執り行うことから、キリスト教の礼拝が生まれました。

(11月26日 nac.today より)

サクラメント (24) :

最後の晩餐から聖餐に至るまで

パンを裂くこと、感謝の祈り、聖体拝領台の秘跡：これら三つの言葉は聖餐を表しているだけではありません。キリスト教の初期においてこの礼典が歩んだ道、すなわち親密な人々による夕食から教会の礼拝行事に至る過程を、端的に表しているのです。



礼拝という概念は、初期のキリスト教徒たちの一部、つまりかつてユダヤ教徒としてシナゴグの礼拝に参加していた人々にしか知られていませんでした。——しかもこの人々はしばらくの間シナゴグの礼拝にも参加し続けていました。同じキリスト教徒で、ユダヤ教的背景のない人々——そのほとんどはギリシア文化を背景にしていたが——の間では、

礼拝と非常によく似た行事として「神秘劇」（エレウシスの秘儀）が行われていました。しかしキリスト教徒は、これらの行事をやらない傾向にありました。

交わりをもたらす食事会

それでも、ばらばらだった小さな教会*は、ある特別な催しに従事することで、自分たちの独自性を構築していきました。おもな夕食会で食卓を囲んだキリスト教徒は、ひと呼吸置き、パンを裂き、そのパンを厳粛な雰囲気一人でひとりに分け与えたのです。また場所によっては、ぶどう酒の入ったゴブレットを回し飲み、その間参加者は、自分たちのいるすべての場所で主イエス・キリストを記念しました。この催しは「パンを裂くこと」として知られていました。

このような厳粛な催しがどういう形態で行われたかについて、使徒たちによる福音書や書簡には、これといった情報がありません。それ故、これを厳粛な枠組みに即して行うことについては、それぞれ教会の代表者たちに任されていました。その結果、それぞれの国々に由来する様々な文化的要素、表現、歌唱、行為が採り入れられました。ですから当初は、こんにち聖餐と呼ばれているものには、様々な形態がありました。

新しい場所、新しい時代、新しい焦点

時が移り変わり、教会も成長しました。会衆はもはや、毎日自宅で顔を合わせることがなくなり、毎週日曜日だけ集会所に集まるようになりました。日曜日とは、七日目ではなく、ユダヤ教の週における第一日目のことです。それは、この日にイエス・キリストの復活を記念するためでした。この日が主の日とされたのも、こういう理由なのです。

和やかに食卓を囲む交わりもそのまま行われましたが、記念的要素は、この交わりの食事会から次第に切り離されていきました。歌唱、朗読、講話にますます焦点が当てられるようになりました。その中で最も重要とされたのが、感謝の祈りでした。この段階において、こうした催しに対する総称(感謝の祈り)は、「神様への感謝」を意味するギリシア語のユーカリスタが語源です。

*小さな教会…初期の教会では、ローマ帝国でのキリスト教徒に対する迫害のために、使徒言行録に記載されているように、礼拝はおもに個人の家で行われました。(ウィキペディアより抜粋一部改変)

飲食から認知へ

程なくして教会は新しい段階に入るようになりました。キリスト教は国教となりました。この頃には会衆は午前中に集まるようになり、個人の家を教会にしてそこに集まるということが行われなくなっていました。教会として専用に造られた建物に集まるようになったのです。

こうして主の晩餐は食卓の交わりという元々の性格を失い始め、サクラメンタルアルタリス(聖体拝領台の秘跡)として知られるようになりました。祭壇近くにある聖体拝領台で、集まっている会衆の前で行われるようになりました。飲食を共にすることから認知すること——もしくは観察すること——へと変化したのです。すぐにこの執行形態が一般的になり、礼拝前に行われるようになりました。

神学的より実用的に

以上が、最初の四百年間における、最後の晩餐から聖餐に至る道筋です。この変遷については、新約聖書(使徒言行録、コリントの信徒への手紙一)、初期キリスト教会の教義書(ディダケー、トラディチオ・アポストリカ)、使徒教父(ユスティノス、エイレナイオス)による著書といった文献からたどることができます。

ちなみに、古代における聖餐の発達は、神学的な理由というより、実用面の事情によるものでした。本当の意味で神学的な理由による変化は、中世になってからのことです。しかもその変化に至るまで、多少の論争が起きています。

サクラメント(25):

存在と臨在

パンとぶどう酒。「『これは私の』体と血である。」二千年もの間、キリスト教徒は最後の晩餐でイエス様が言われたこの言葉に頭を悩ませてきました。この「…である」とはどういう意味なのでしょう。この問いに対する答えは、時代ごとの考え方を形成してきました。

どちらか一方をめぐる論争

400 年ほどの間、この問題は全く解決できないままでした。そこで教会は様々な答えを許容せざるを得ませんでした。その状態が変化したのは、キリスト教がゲルマン民族やフランク族に伝播し始めた 8 世紀のことです。古代ギリシア人特有の現実に対する多層的な考え方をどう理解すればよいのかわかりませんでした。

新しい考え方では、象徴か物か、しるしか現実か、という二者択一しかありませんでした。そして、この二極化が論争を招きました。これ以降、成分か物質か、象徴か霊か、との間で解釈が揺れていました。

これが主の晩餐をめぐる二大論争へと発展しました。9 世紀、フランク系修道院の修道院長と修道士の一人が公の場で意見対立しました。11 世紀には、トゥールにあった司教座聖堂学校の校長が司教会議のたびにもめ事を起こしていました。しまいには、信徒たちの歯がキリストの体を噛んでいるということを一自分ではばかげていると思いつつも司教会議の席上で宣誓せざるを得なくなりました。

ギリシア哲学への回帰

論争が終結したのは、スコラ哲学の学者たちがルネサンス前夜に古代ギリシアの哲学者たちを再発見した時でした。ここでは成分と偶有性*——中身と形状——を説明するための模範が示されました。当時、成分とは、こんにち一般的に理解される化学の概念ではなく [分子実体]、物事の最も奥底にある本質を指すものでした。ですから偶有性とは物の性質を表したのです。

実存のものの現象に対する思考過程にも応用され、パンとぶどう酒もその偶有性つまりその外見と成分——を維持する、という結論に至りました。一方で、その成分——中身、本質——は変化します。こうしてキリストの体と血は、物的に存在するのではなく、その本質において実存するのです。神学ではこうした考え方を化体説と呼んでいます。

化体説は 200 年にわたって教会にある種の平和をもたらしてきました。ところが宗教改革者たちの中で新たな紛争が起きました。
(1 月 11 日 nac.today より)



なぜ「…である」の意味がそれほど重要なのでしょうか。それは、聖餐の執行におけるイエス・キリストの臨在に関わるからです。しかしイエス様は「二人または三人が私の名によって集まるところには、私もその中にいるのである」と仰せになったのではないのでしょうか。確かにその通りです。しかし、永遠の命を得るために何を食べ何を飲むべきかということも仰せになりました。ここで議論するのは、聖餐におけるキリストの体と血の存在——実在として認知される現象、いわゆる「本当の臨在」——についてです。

一つの問いに複数の答え

最初の数世紀において、キリスト教徒はこうした問題についてあまり考えていませんでした。ただ主の晩餐を執り行っていただけでした。潮目を変えたのは、紀元 4 世紀のコンスタンティヌス帝によってキリスト教が国教となり大規模に普及した頃でした。たくさんの新たな洗礼志願者が教理を教わるわけですが (教理口授法)、そのためには教材が必要でした。

ギリシア教父たちは、ギリシア哲学における、物事の原型の象徴という説明法を見出しました。従って、目に見えるもの、すなわち物の世界は、目に見えない、美しく善良な真の世界の原型と同質の象徴もしくは複製とされました。ですからキリストの体と血の原型も、パンとぶどう酒という象徴の中に存在させることが容易にできたのです。

ラテン教父たちは、独自の考え方を持っていました。その中で最も影響力があったのは、パンとぶどう酒は体と血という本物 (レス) のしるし (シグナム) であるとする考え方でした。とはいえこれはただの象徴的関係ではありませんでした。火のない所に煙は立たないわけで、しるしは実質的に本物と関係しているのです。

* 偶有性…ある事物の本質的ではなく偶然的な性質。人間一般における皮膚の色のようなもの。偶有的属性。偶性。付帯性。[広辞苑 第七版]